

第7回
震災から3年。「フクシマの悲劇」を「フクシマの奇跡」にするために。

地震、津波、そして原発事故。いまだかつて日本人が直面したことのない非常事態のなか、福島県立医科大学では誰一人として災害医療の現場を離れることはなかった。その陣頭指揮をとった理事長兼学長の菊地臣一先生に震災からの教訓を語っていただいた。

Photo: Miki Fukano Design: Takayoshi Ogura

聞き手・女優 紺野美沙子さん
福島県立医科大学理事長・学長 菊地臣一氏



紺野 震災から三年が過ぎて、どうしても記憶が風化しつつある印象ですが、震災当日は先生はどちらに？

菊地 当日は東京にいたんです。海外から専門家を招いてカンファレンスを開催していました。そこにあの地震です。翌朝、すぐに先生方を成田から飛行機にお乗せして、十三日の朝、六時間半かけて大学まで戻ってきました。車にペットボトルの水七百本積んで。

紺野 七百本！

菊地 福島医大は岩盤の上に建っているんで、地震の被害はなかったんです。電気も大丈夫。ただ水がだめだった。「一床一トン」という言葉があるんですけどね。一ベッドに一日一トンの水を必要とする。すぐに復旧を依頼したのですが、対策本部は大混乱で、なかなか情報が伝達されませんでしたね。

紺野 そこに原発の事故が降り

かかってきたわけですね。

菊地 テレビで爆発の様子が報じられるけれど、その原因すらよくわからない。このままでいたら、総崩れになると思います。でも大学病院が引き揚げたら、「ハブ」がなくなるわけですよ。配電盤的な機能が失われてしまう。ここが最後の砦だ。ここから逃げ出すわけにはいかないと腹を括りました。

紺野 踏みとどまる勇氣というのはすごいことですね。

菊地 総崩れの要因というのは、「人心不安」なんです。いったいどうなるんだらうという不安とところが、放射能の健康被害というものを、わかりやすくきちんと説明できる人が日本にはほとんどいないんです。そこで長崎大学の専門の先生に直接お願いしてすぐに来ていただき、それから毎日、職員や県民、あらゆるところへ説明に回ったんです。それがなかったら、やっぱり

り総崩れでしたかね……。

紺野 知識が与えられないまま、やみくもに不安だけが募るというのは最悪ですね。

菊地 危険性や安全性に関する正しい理解形成を指導する、リスクコミュニケーションの専門家が日本に少ないというのが問題なんです。おかげで病院内の動揺もおさまり、誰ひとりとして災害医療の現場を放棄しなかった。これは賞賛に値します。私の誇りです。

紺野 今回の震災の教訓というのは他にもありますか？

菊地 私自身が痛感したのは、支援する側への支援がない、ということなんです。日本で自己完結

組織というのは自衛隊しかないんです。自分で食事も用意するし、寝るところも用意する。ところが、われわれ医療関係者も警察も消防も、誰かの支援を受けないと立ち行かないんです。

ところが支援する側には何も無い。食糧もない。ガソリンもない。それでも支援する側は自分の求められる役割を果たさなければならぬ。

紺野 たしかに、それは盲点ですね。

菊地 いまも二百万県民の健康調査をやっているんですが、その最前線に立って仕事をしている人たちがもつらいんです。そこに怒りがぶつけられるわけです。



震災時の福島県立医科大学での患者受け入れの様子。3月12日に第1原子力発電所から20km圏内の住民に避難命令が出され、約6万2千人が避難した。それと同時に、避難地域の医療機関からの患者の受け入れが始まり、病院内のスペースは病床で埋まった。

今、医師としてのあなたを 日本でいちばん求めているのは、 東北です。

たとえ病棟があっても、立派な医療設備があっても、
清潔なベッドがあっても、
お医者さんがいなければ、そこは病院とは言えない。
いま、東北が直面しているのは、その現実です。
そして、東北の医師が不足しているという現実は、
東北以外のお医者さんにしか救えない。そう思うのです。
この誌面を借りて、医師であるあなたにお願いがあります。
移り住んで来てほしいとは申しません。
週に2、3日、一年にすれば100日程度でもいい。
あなたの時間を分けていただけないでしょうか。
東北の力になっていただけないでしょうか。
人の幸せは、健康があってこそ生れるもの。
そのことを誰よりも知るあなたの力を、
今、誰よりも求めている人々が東北にいます。



東北医療福祉事業協同組合 **どこよりも、いのちを愛する東北へ。**

東北エリアにおいて医療・介護などの豊富な経験をもとに経営環境向上のための運営支援、
また、人材確保や教育までトータルにサポートします。

■上記広告に関するお問い合わせは

E-mail: doctor@sg-kumiai.or.jp Tel: 0800-800-5533 (通話料無料)

受付時間 平日9時～17時(土日祝日は除く)

東北医療福祉事業協同組合 仙台事務所
〒980-0022 宮城県仙台市青葉区五橋 1-1-17 仙台ビルディング駅前館6階

URL <http://www.sg-kumiai.or.jp/>

検索キーワード



菊地臣一

Shinichi Kikuchi

昭和21年、福島県生まれ。46年福島県立医科大学卒業。附属病院整形外科入局。52年カナダ・トロント大学ウェルズリイ病院留学。55年日本赤十字社医療センター整形外科副部長。平成16年福島県立医科大学医学部長、18年副理事長兼附属病院院長を経て、20年理事長兼学長に就任。

たまたまその人が行政にいたり、看護師だったり、ドクターだったりするだけで、その人たちも被災者なんですよ。

紺野 それなのに矢面に立たされるわけですね。

菊地 そういふ人たちの心のケアをどうするのか。やはり、支援する側への支援というものが薄いですね。

紺野 いま健康調査の話ができましたが、福島の話はどうなんでしょう？

菊地 福島県の健康指標は日本で最下位になりました。心筋梗塞、脳卒中、震災関連死。元気で動ける人は次の新しい生活を始めている。ところが、家を追われた高齢者は動かない。仕事

を失い、心の痛みのために動けないんです。人間というのは動くことが前提にできているので、動かないとどんどん体が悪くなっていく。これをどうやって食い止めるかが問題です。

紺野 全国の医療関係者からの支援の動きというのはあるんですか。

菊地 寄附講座というのを開設しました。薬の卸問屋さんからの資金提供を元に、あちこちから寄付を募って、それを人件費にして全国からお医者さんに来てもらっています。今十二人ぐらい。とりあえず大学の教授なり准教授の肩書を与えますが、大学にはいません。医療崩壊している地域、とくに被災地に

行ってもらっています。

紺野 そういう受け皿があると、外からでも来やすいですね。

菊地 問題はそのほかの医療スタッフ。看護師さん、理学療法士、レントゲン技師、臨床検査技師、こういう人たちがいない。そっちのほうが深刻なんです。

今起きている現象は、医師不足ではなくて、ほんとうの意味の医療崩壊なんです。

紺野 お医者さんだけでなく、医療スタッフへの協力要請も必要というわけですね。

菊地 ただ、いつまでも後ろ向きに議論をしても始まらない。私はこの三年という節目を、リセットのいい機会として前向きにとらえようと提案している

紺野美沙子

Misako Konno

昭和55年、NHK連続テレビ小説『虹を織る』でヒロインを演じる。その後、女優として活躍するかたわら、国連開発計画親善大使など国際協力の分野でも活躍。平成22年から「紺野美沙子の朗読座」を主宰。平成26年5月～7月、演劇『日本の面影』を東京および全国で上演予定。

んです。福島県民自らが立ち上がらなければ。自分たちが前向きな姿勢を見せることで、はじめて、他府県の人たちが応援してくれるんです。原発もいずれ廃炉作業をやらなくてはならない。でも、そのノウハウはどこも持っていない。だったらその技術を担う次の世代の若者を福島の子カラで育てて、彼らに頑張ってもらえることが、復興の最初の足がかりになるのではないかと、復讐の悲劇」と嘆いてばかりではだめで、「フクシマの奇跡」と言われるようにしないといけないんです。**紺野** ぜひ応援したいと思います。きょうはどうもありがとうございます。

